



TITLE:

古代アラビア語の所謂動詞派生形II形について: テンス・アスペクト体系に関する一仮説

AUTHOR(S):

西尾, 哲夫

CITATION:

西尾, 哲夫. 古代アラビア語の所謂動詞派生形II形について: テンス・アスペクト体系に関する一仮説. 言語学研究 1984, 3: 23-55

ISSUE DATE:

1984-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87907>

RIGHT:

古代アラビア語の所謂動詞派生形Ⅱ形について

テンス・アスペクト体系に関する - 仮説

西 尾 哲 夫

0. 本稿の目的

記述的便宜上、アラビア語の動詞体系は、原形 (basic form) とそこから形態的に派生される 14 種の派生形 (derived form) に分類される。Ⅱ形 (second form) は第二子音の重複によって派生され他動詞的 (transitive), 使役的 (causative), 強調的 (intensive), 多重的 (extensive), 反復的 (iterative) 等の意味を原形に対して有するとされる。しかしながら、Ⅱ形の機能に関する従来の諸記述は規定的で教義的な色彩が濃く、必ずしも言語事実そのものに裏付けされた実証的考察とは言い難い。本稿では、Ⅱ形の機能に関する一つの仮説を提出し、それについて、古代アラビア語で書かれた最古の最もまとまった言語テキストであるコーランを資料として実証してみたい。勿論、所与のⅡ形の意味解釈には可能な限り客観的な方法が望ましいが、ここでは、コーランの注釈書をもとにⅡ形とⅣ形或はⅡ形と原形を対比させることで、独断的な解釈の陥穽にはまる愚をさけたい¹⁾。

1. 従来の研究とその問題点

Wright (1896~98) は、Ⅱ形の基本的機能を記述するために、「intensive (al-mubālagah)」と「extensive (al-takṭīr)」の二つの用語を使用している。つまり、原形によって示されるのと同じ現象が、激しい (intensive) 場合、或は時間的に長い (temporally extensive) 場合、関与者が多い (numerically extensive) 場合、反復されている (iterative, frequentative) 場合のいずれかの場合に、原形の代りにⅡ形が使用される。

例 intensive ;

ḍaraba (I) 'to beat' : ḍarraba (II) 'to beat violently'

extensive ;

temporally extensive ;

ṭāfa (I) 'to go round' : ṭawwafa (II) 'to go round much'

numerically extensive ;

qatala (I) 'to kill' : qattala (II) 'to massacre' (object pl.)

baraka al -jamalu (I) 'the camel kneeled down'

barraka al -naqamu (II) 'the camels kneeled down' (subject pl.)

さらに、これらの基本的な機能に加えて、そこから二次的に派生した機能として「causative or factitive」な機能と「declarative or estimative」な機能と「denominative」な機能の三つをあげている。

例 causative - factitive ;

fariha (I) 'to be glad' : farraha (II) 'to gladden'

declarative - estimative :

kadaba (I) 'to lie' : kaddaba (II) 'to think or call one a liar'

denominative ;

xaymat -un 'tent' : xayyama (II) 'to pitch a tent'

salām -un qalay -kum 'peace be upon thee'

sallama qalay -hi (II) 'he said to him "peace be upon thee"'

また、II形とIV形はともに使役的な機能を有することになるが、彼によれば、IV形の場合はその機能が基本的で本来的であるのに対して、II形の場合は二次的に派生された機能であるという点で両者は相違するとされる。

Wright と同様の記述は、彼以後の入門的著作を含めた殆んど全ての文法書の説明においてもそのまま踏襲されている。それらに共通する不備は、各々のII形の機能についての分類記述しか与えられておらず、たとえ、「intensive」或は「extensive」な機能が基本的機能であるとする見解が正しいとしても、その機能と他の諸機能との間にいかなる有機的関係があるかについての説明が全くないことである。それに対して、有機的説明を試みたのが MacDonald (1963), Bolozky et Saad (1983) であるが、これらの研究も含めた従来の研究の不備を総合すると次の三つに集約できる。

- (1) 「intensive」或は「extensive」な機能を基本的機能とみなしていること。その場合、他の諸機能との関係について有機的説明がなく、分類的である。
- (2) II形についてもIV形と同様に原形との間に派生関係をもとめていること。その場合、原形とII形との分布状態には十分な関心が向けられていない。

(3) 記述において、統辞論、意味論、語用論等のレベルが区別されていないこと。

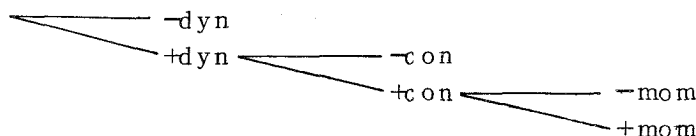
しかしながら、これらの不備は方法論的稚拙さだけに帰因するのではなく、共時的統一体というよりはむしろ通時的複合体という古典アラビア語自体の性質にも帰因し、さらに西欧のアラビア語学が結局は中世アラブ文法学を礎としており、従って、そこで犯された誤謬をそのまま無批判的に踏襲したことにもその遠因があると考えられる²⁾。

2. 記述の枠組

以下の議論では、Dik (1978, 1980) で展開されている機能文法 (Functional Grammar 以下FG) を基本的枠組として使用する。彼によれば、実世界の現象は、動的か否かの〔±Dynamic〕(以下〔±Dyn〕) 関与者に支配されるか否かの〔±Control〕(以下〔±Co〕) の素性で次のように分類される。

	+Dynamic	-Dynamic
+Control	Action John killed Jane	Position John held Jane in his arms
-Control	Process John fell in love with Jane	State John is in love with Jane

ここで、言語表現から独立した実世界の現象のレベル(現象レベル)と、それに対する話者の認知のレベル(認知レベル)と、言語形式による表現のレベル(表現レベル)の三つのレベルを設けるならば、Dikの分類は現象レベルの分類となる。〔±Dyn〕な現象は、認知レベルで意味機能が決定され、それが表現レベルへの入力となり、表現レベルでは、アスペクト形式の持つアスペクト機能と動詞の内在的なアスペクト特性の結合によって表現される³⁾。逆に言えば、アスペクト機能とアスペクト特性の二つがアスペクト的意味を決定することになる⁴⁾。ここでは、アスペクト特性の分類にもDikの分類を応用し、さらに次の階層図に示されるように、〔±dyn〕を完結的か否かで〔±conclusive〕(以下〔±con〕)、また瞬間的か否かで〔±momentaneous〕(以下〔±mom〕)に下位分類する。



これによって、動詞を分類すると次のようになる。

$A\alpha$	$B\alpha$	$C\alpha$	$D\alpha$	$A\beta$	$B\beta$	$C\beta$	$D\beta$
-co				+co			
-dyn	+dyn			-dyn	+dyn		
	-con	+con			-con	+con	
		-mom	+mom			-mom	+mom

- 例 A α John owned the house (*John is owning the house)
 A β John stayed motionless (*John is staying motionless)
 B α The water ran over there (The water is running over there)
 B β John ran over there (John is running over there)
 C α The stone fell down (The stone is falling down)
 C β John stopped (John is stopping)
 D α The whip cracked (The whip is cracking)
 D β John jumped (John is jumping)

α , β の相違は、動作が制御可能か(β), 不可能か(α)による。A α , A β は各々DikのStateとPositionに対応する。BとC, Dの相違は、動作が必ず完結することを前提とするか(C, D), 否か(B)である。つまり, C, Dの場合には, 必ず動作の完結的变化が伴う。CとDの相違は、動作が瞬時的であるか(D), 否か(C)である。

3. II形の派生と機能

3.1. 状態化 (stativization)

Soden (1969²)によれば、東セム諸語のみに在証される状態形(Stative)は、その時制体系を構成しており、また一方において「活用された名詞(ein konjugierte

Nomen) 」でもある。

Akkadian tense system:

parāsu 'to divide'

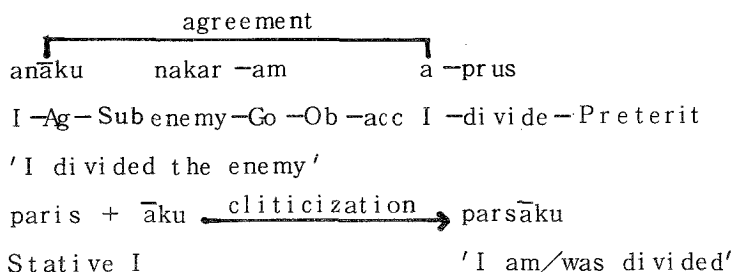
(y)iprus 'he divided' -- Preterit

(y)iparras 'he divides' -- Present

(y)iptaras 'he has divided' -- Perfect

paris 'he is/was divided' -- Stative

しかし, Buccellati (1968) によれば, 状態形は明示的な時制的指示機能を有さない一種の名詞文 (nominal sentence) であって, 他の型の名詞文と相補的分布関係を有するものとされる。つまり, 他の時制の prefix が主語との一致によって形態論レベルの操作で付加されるのに対して, 状態形の suffix は, 統語的操作をへて照応的代名詞が cliticize されたものである。



また, Rowton (1962) によれば, 状態形の持つ意味機能は, 「absence of change (state)」或は「lack of change (aspect of action)」を表現するものであって, 特に, 行為 (つまり (+dyn)) を示す原形動詞の状態形は, その行為による結果としての状態を表し, 完了 (perfect) 的アスペクト機能を有することになる。従って, 一項動詞の場合はともかく, 二項動詞 (或はそれ以上) の場合は, 結果的状态が行為者と被行為者のどちらに顕現するかによって, 対応する状態形は, 能動的にも受動的にもなる。

(1) anāku bīt -am a -spah

I -Ag -Sub house -Go -Ob -acc I -destroy -Preterit

'I destroyed the house'

(2) bīt -um sapi h -∅

house- \emptyset destroy-Stative-he

'the house has been/had been/is/was destroyed'

- (3) anāku asl -am a-mhur

I-Ag-Sub sheep-Go-Ob-acc I-receive-Preterit

'I received the sheep'

- (4) mahr-āku

receive-Stative-I- \emptyset

'I have received/had received'

- (5) * asl -um maher- \emptyset

sheep- \emptyset receive-Stative- \emptyset

'the sheep has been/had been/is/was received'

- (6) anāku a -mtahar

I-Ag-Sub sheep-Go-Ob-acc I-receive-Perfect

'I have/had received the sheep'

(1)の「こわす」という行為によって、結果的状态が顕現するのは、「私」ではなく「家」の方であるから、(2)の状態形では「家」が主語になり、全体的に受動的になる。一方、(3)では「受けとる」という行為によって、結果的状态が顕現するのは、「ひつじ」ではなく「私」であるから、(4)の状態形では「私」が主語になり、全体的に能動的になる。また、「受けとった」→「受けとっている(状態)」の結果的状态を表現する点において、(4)の状態形と(6)のPerfectは類似した意味を有する。ただし、(6)では、「受けとる」という行為と「(受けとって)持っている」という結果的状态が関係づけられて認知されるのに対して、(4)はその限りでない。ここで、認知レベルの概念として「焦点(focus)」を導入するならば、Perfectの場合は、行為とその結果的状态の双方に話し手の焦点があてられているのに対して、状態形の場合は、どちらかと言えば結果的状态の方に焦点があてられていると表現できる。

以上のことを総合すれば、状態形(或はそれを含む文)は、主語と非動詞的叙述部(non-verbal predicate)から構成される叙述(predication)と規定できるが、そこで問題となるのは、状態化における〔±control〕の素性の取り扱いである。(3)の場合、Ag-Subの指定を持つ「私」は「(ひつじを)受けとる」という行為に対して支配的であり、従って、〔+co〕の素性指定をうける。一方、(4)の例の場合は「(受

けとって)持っている」という状態を示す状態形によって、「私」は言わば形容詞的に叙述されているのであり、非支配的存在となる。従って、Ag-Sub の指定をうけていた「私」は、状態化によって、 \emptyset -Sub の指定を受ける「私」へと転化される。また、(2)で示されるのは、「こわす」という行為、つまりAg の「私」にとっては支配的だが、Go の「家」にとっては当然非支配的である行為をうけた「家」の「こわれている」という状態であるから、当然そこにおいても「家」は非支配的である。一方、「こわす」という行為とAg の「私」との間の支配的關係も、「こわれている」という状態との間にはもはや存在しなくなる。つまり、「家」のかつてのGo 機能は失われ、 \emptyset 機能が付加され、さらにSub 機能が付加されることになる。その意味において、状態化は、Ag, Go の意味機能はそのままSub, Ob の統語機能の指定のみが異なる受動化とは相違する。

以上のような性格を持つ状態化によって、2章で分類したA～Dの型の動詞は次のような扱いを受ける。

(1) A型動詞 (〔-dyn, (-con, -mom)])

A α 型の場合は、本来的に静的な状態を示すものであるから、状態化においても \emptyset 機能を付加された要素が \emptyset -Subとして顕現する。A β 型の場合は、同様に静的な状態を示すものであるが、状態化によってPo の持つ支配は取り除かれ、A β 型動詞の示す静的現象全体がA α 型と同様の状態として話者に認識され描写されることになる。従って、Po 機能を付加された要素が同様に \emptyset -Subとして現れる。

(2) B型動詞 (〔+dyn, -con (-mom)])

これらの動詞は、静的な現象に対応しておらず、またその動作による結果的状态も残らない動的現象を示す場合であるから、何らかの静的状態を表現する状態形は生起しない。(例えば、「歩く」という意味の動詞の場合「歩いた」という動作の完了後に「歩いている」という状態は存在しない。)

(3) C型動詞 (〔+dyn, +con, -mom])

これらの完結的变化を前提とする動詞の場合は、その動作の完了後に結果的状态が当然顕現する⁵⁾。状態形においては、もとのAg, Fo, Prが \emptyset -Sub の指定を受けることになる。(例の(3)(4)を参照。)

(4) D型動詞 (〔+dyn, +con, +mom])

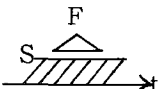
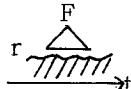
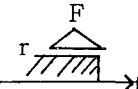
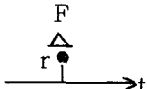
これらの瞬時的な完結的变化の場合は、動作主であるAg, Fo, Prの方には結果的状态は残らない⁶⁾。ただし、二項動詞の場合には、Ag, Fo, Prによる動作の影響を

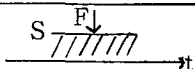
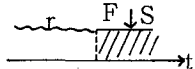
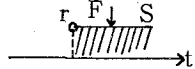
うけるGo の方に結果的状态が顕現する。状態形においては、もとのGo が \emptyset -Sub の指定を受けることになる。(例の(1)(2)を参照。)

状態形の生起の可能性は次の図のようにまとめることができる。

$A\alpha\beta$	$B\alpha\beta$	$C\alpha\beta$	$D\alpha\beta$	
			I	II
○	×	○	×	○

動態現象をr として、瞬時的現象をo, 非瞬時的現象を~~~~, 完結部を|, 静態現象をS として— で表示し、さらに焦点F (F_{\downarrow} 或は $\triangle F$ で表示する) があたっていれば、順に各々 ~~~~ , \bullet , |, //// で表示するならば、A~D 型動詞の状態化は次のように図示することができる。(例えば、焦点のあたっているA~D 型動詞のperfective の場合は、

A :  B :  C :  D :  となる。)

	\emptyset -Subになる要素	状態形の示す状態	
A	\emptyset , Po	状態 (結果の含意はない)	
C	Ag, Fo, Pr	結果としての状態	
D II	Go	結果としての状態	

3.2. 状態化とII形

以上のような状態化による状態形をProto-Semitic 或はProto-Arabic の段階に再構できるものとして、II形をそこから派生させると仮定するならば、II形の持つ基本的機能は、状態形によって示される状態 (以後、状態形による話者の認知を状態相、それによって示される状態を状態相的状态と呼ぶ) を現出させる現象に対応する意味機能 (以後、状態の機能と呼ぶ) と表現できる。II形を状態形から派生させる派生関係に対して根拠となり且つメリットともなるのは、この派生関係によってII形の低位機能の一つであるdenominative な機能が一律に自動的に説明されることである。つまり、状態形は原形からだけでなく、nominal からも派生されるのだから、原形から直接的

にⅡ形を派生させて、denominative な機能については別箇にnominal から派生させる方法よりも、状態形から派生させる方法の方が、経済的であり、その意味で記述的妥当性が高いと言える。

次に各々の型の動詞がどのように扱われるか考察する。

(1) A 型動詞

これらの動詞の状態相的状态は、結果の含意のない状態であり、Go (Ⅱ) (Ⅱ形のGo の意味以後、同様に原形はGo (Ⅰ), Ⅳ形はGo (Ⅳ)のように表現する) になるのは、状態形で \emptyset -Subの指定をうける \emptyset (Ⅰ), Po (Ⅰ) であるから、Ⅱ形は言わゆる作為動詞 (factitive) と同じ機能を原形に対して有することになる。denominative なⅡ形も対応する原形が存在しないだけで、同じ範ちゅうに入る。以後、このようなA型動詞の機能を、作為的功能と呼ぶ。

(2) B 型動詞

状態形が生起しないのだから、当然これらの動詞のⅡ形も生起しないことが予想される。

(3) C 型動詞

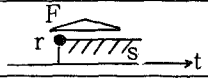
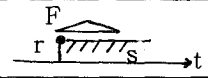

これらの動詞の状態相的状态には、行為の結果の含意があり、Go (Ⅱ) になるのは、状態形で \emptyset -Subの指定をうけるAg (Ⅰ), Fo (Ⅰ), Pr (Ⅰ) であるから、全体的にⅣ形と同じ使役的な機能を持ち、さらに行為の結果を含意する結果相 (perfect) と同じ機能を原形に対して持つことになる。以後、このような機能を結果的使役機能と呼ぶ。

(4) D 型動詞

これらの動詞の状態相的状态にも、行為の結果の含意があるが、C型動詞の場合と異なり、Go (Ⅱ) になるのは、状態形で \emptyset -Subの指定をうけたGo (Ⅰ) である。従って、Ⅱ形は原形と同じ項構造を持ち、同時にC型動詞の場合と同様に結果的意味をも含意することになる。以後、このような機能を単に結果的機能と呼ぶことにする。

状態形、原形、Ⅳ形とⅡ形の相違は、後者では焦点が状態と動態現象の双方にあてられていることである。

以上のことは次のようにまとめられる。

	Go(II)になる要素	機 態	類似形	
A	∅ (I), Po (I)	作為的機能	IV形	
C	Ag(I), Fo(I), Pr (I)	結果的使役機能	IV形	
D	Go (I)	結果的機能	原形	

4. コーラン中のⅡ形の分析

周知のように、歴的存在としてのコーラン(al-qurʿān)は、預言者ムハマンドの没後、人々の記憶を集録したものであって、正確には彼の発話行為の忠実な記録とは言えないが、概略、その言語は当時(7C頃)のメッカを中心とするヒジャーズ(Hijāz)地方の古代アラビア語の方言的異体(variant)と規定できる。

4.1. 統計的分布

コーラン中に実際に生起するⅡ形に関して、対応するA～D型の動詞型或は名詞との関係からその分布状況をまとめると次の表ようになる。

表1 Ⅱ形の分布

	A	B	C	DI	DII	denom	total
verbal	68	0	25	0	47	29	169
non-verbal ⁷⁾	19	2 ⁸⁾	16	0	27	9	73
total	87	2	41	0	74	38	242
verbal の のべ数	515	0	180	0	191	406	1292
のべ数の%	40%	0%	14%	0%	15%	31%	

このⅡ形の分布状況は、前章での仮説と極めてよく対応しており、次の表に示されるIV形の分布状況との間に、特にB型について顕著な相違が観察される。

表 2 IV 形の 分 布

	A	B	C	DI	DII	denom	total
verbal	117	27	61	3	42	9	259
non-verbal	11	4	3	0	7	3	28
total	128	31	64	3	49	12	287
verbal の のべ数	1649	244	1228	3	294	65	3483
のべ数の %	47%	7%	35%	0.1%	9%	1.9%	

また、原形(I)、II形、IV形のA～D型動詞と名詞に関する共起関係の分布は次の表の
ようにまとめられる。

表 3 原形(名詞)、II形、IV形の共起関係

	II	IV	I & II	I & IV	II & IV	I&II&IV	total
A	33	51	21	44	18	15	182
B	0	12	2	19	0	0	33
C	10	16	10	30	3	15	84
DI	0	1	0	2	0	0	3
DII	30	20	30	14	6	9	109
denom	32	8	6	2	2	0	50
total	105	108	69	111	29	39	461
%	23%	23%	15%	24%	6%	9%	

4.2. II形とIV形

I、II、IV全形が生起する場合について、A～D型動詞の各形の項(argument)の意
味機能からみると、三者の関係は次のようになる。

	関 係	A	B	C	D I	D II
①	I ≍ II = IV	○		○		×
②	I = II ≍ IV	×		×		○
③	I = IV ≍ II	○		○		×
④	I = II = IV	×		×		○
⑤	I ≍ II ≍ IV	○		(?)		(?)

①と②は、理論的に予想されるように相補的分布関係にある。①と③、②と④は再帰的IV形の場合で、各々包含的分布関係にある。⑤は、estimative-declarativeなII形の場合であり、これについては4.3で詳論する。

4.2.1. 統語的論拠

D型動詞のII形の場合も、Go-Causee-Obを消去(delete)する特別な統語規則を設定するならば、意味的にはともかく統語的にはIV形と同じ使役化によって、II形を原形から直接に派生させる方法も不可能ではない。従って、①～④の各場合について考察を加える前に、II形とIV形を同質の使役化として扱えないことに対する幾つかの統語的論拠を次に示す。

(1) 分布の相違

B型、D I型動詞については、II形は理論的にも実際のにも生起しないが、IV形は生起する。例えば、qaraʔa "to read" というB型動詞のIV形はコーラン中にも在証されるが、II形は在証されない。

(7) 87-6 sa-nuqriʔu-ka

future marker-we-Ag-Cr-Sub-Imperfective-IV-you-Go-Ce-Ob

'We (God) shall cause you (Muhammad) to read (a verse)'

(2) 受動化の制約

AgとGoをとる二項動詞からのIV形の場合、Go-Causee(=Ag(I))にSubの統語機能を付加させる受身化は可能であるが、語い化されている場合を除いて⁹⁾、Go(=Go(I))にSub付加させる受身化は不可能である。

not Perfective-IV-we-Ag-Cr-Sub on-you the-Quran-Go-Ob-Ce
-acc

li-tasqā

to-Subjunctive-you-be miserable

'we did not cause the Quran to go down on you(Muhammad)in order
for you to be miserable (but in reality, the Quran had gone down)'

(15) 43-30 law lā nuzzila hādā al-qurʿān-u qalā rajul-in

if not Perfective-II-passive this the-Quran-Go-sub-nom on
min al-qaryatayni qazim-in man-gen

from the-towns-two-gen great-gen

'why has this Quran not been sent down on a man of the two
towns who was great (and in reality, the Quran had not gone down
on him)'

IV形の否定の場合は、(14)のように使役行為(英語ではmatrix-verb "cause")
のみが否定の範囲(scope)に入っており、従って被使役行為(complement-verb
"go down")の顕現とは無関係に使われうる。一方、II形の否定の場合は、(15)の
ようにその双方が否定の範囲に入っており、常に被使役行為が顕現していないことを含
意する。

(4) 目的語省略の制限

II形の場合は、常に文脈等から回復可能な場合にのみ目的語(Go-Ob)を省略で
きるが、IV形の場合はその限りでない(詳細は4.2.3参照)。

以上のような統語論的論拠は、II形とIV形を同一の基底表示から派生させる方法が
妥当でないことを示している。

4.2.2. 意味的論拠(①②の場合)

IV形の場合、対応する原形がα型かβ型かによって、つまりGo-Causeeが使役され
る行為に対して非支配的(α型)か、支配的(β型)かによって、各々認可の意味
(permissive)と使役の意味(causative)を持つことになる。

(16) 20-85 mā ʿaqjāla-ka qan qawm-i-ka
what-Fo-Cr Perfective-IV-you-Go from people-gen-yonr
-Sub -Ce-Ob

'What made you (Mose) hasten from your people?'

- (17) 11-34 qad jādalta-nā fa-ʔaqtarta jidāl -a-nā
 then-Perfective-I V-you dispute-Go-Ce-Ob-acc-our
 -Ag-Cr-Sub
 'You (Noah) disputed with us and allowed our dispute to
 be(come) much'

(16)の場合、Causer からの使役の効果の影響下に、Causee である「モーゼ」が自らの支配的意志で「急ぐ」という行為を始めるという使役の意味をIV形ʔaqjalaは有する。一方、(17)の場合は、Causee の「論争(jidāla)」にはそのような支配的意志はなく、またCauser である「ノア」も「論争が大きい」ことに対して何もせず放任しておいたという状況であるから「大きい(大きくなる)ままにしておく」という認可的読みのみがなされる。

II 形の場合は、常に α 型の現象と対応する状態形から派生される以上、β 型の II 形においても支配能力のない Go が現出することが理論的には予想できる¹⁰⁾。

- (18) 10-12 law yuqajjilu allāh-u li-l-nās-i al -šarr-a
 if Imperfective-II God-Ag-Sub to-the-people-genthe-evil-Go
 -Ob-acc
 'If God had hastened the evil to the people'
 (19) 17-19 mā našāʔu li-man nurīdu: what we (God) will to whomever
 we wish
 (20) 18-57 al -qadāb-a: punishment
 (21) 38-15 qitt-a-nā: our portion
 (22) 48-20 hādīhi: this (the promise)

(18)では、(16)のように「悪(al -šarr)」が「神」からの間接的な使役の効果による操作によって、自らの意志で「急ぐ」ようにさせられるのではなく、言わば「神」の直接的な行為にふれて「急いでいる」状態に置かれるのである。そこには「神」の意志だけがあり、Go の意志の参加はない。(19)～(22)のqajjala の他の4例でも非支配的なGo しか生起していない。

- (23) 20-41 najjaynā-ka min al -ḡamm-i
 Perfective-II-we-Ag-Sub from the -worry-gen
 -yon-Go-Ob
 'We (God) delivered you (Mose) from the worry'

- (24) 61-10 ...tijārat-in (∅-relative) tunjī-kum min qadāb-in
trade -Fo-Cr-Sub Imperfective-IV from punishment-gen
-you (pl) -Go-Ce-Ob
'Shall I point you to a trade which will save you from a
punishment'

これらのnajā "to escape"¹¹⁾(C型動詞)の例は両者の相違をより明確にしてくれる。(24)では「取引き(tijārah)」によって、信徒達が自らの意志で「懲罰(qadāb)」から「逃れる」ようにさせられるのであり、(23)では、「神」の御手によって「モーゼ」が「暗い気分(al-gamm)」から「救われている」状態に置かれるのである。そこに描かれているのは、「神」の絶対的自由意志の行使だけで、元来支配能力を持つはずの「モーゼ」自身の意志的行為の含意はない。

ここで注意すべき点は、言語表現と現実の現象とが必ずしも一対一の対応をする必要がないことである。

- (25) 10-74 najjaynā-hu wa man maqa-hu fī al-fulk-i
Perfective-II-we-Ag-Sub and who-with-him-Go-Ob in the
him-Go-Ob -ark-gen
'We (God) delivered him (Noah) and those with him in the ark'
- (26) 29-14 ?anjaynā-hu wa ?ashāb-a al-safīnat-i
Perfective-IV-we-Ag-Cr-Sub and follower(pl)-Go-Ce the
-him-Go-Ce-Ob -Ob-acc -ship-gen
'We (God) delivered him (Noah) and the followers of the ship'

(25)と(26)は同一の現象を表現しているが、言語使用者(ここでは、ムハンマド)の視点に応じて、相異って認識されている。つまり、「神」の使役的行為に視点のある(26)に比較して、(25)では、II形を使うことによって「神」の絶対性と「ノアとその従者達」の無力性が強調されることになる。

このような直接性(directive)と間接性(manipulative, indirective)の対立の観点から見た場合、IV形の方は間接性に対する有標(marked)な形式であり、II形の方は直接性に対する有標な形式であると規定できるが、この対立は絶対的対立ではなく、程度による相対的対立であることに留意すべきである。しかしながら、II形の表

次に、A～D型動詞の各々のⅡ形が理論的に予想される通りの機能を有しているかについて、具体例をあげながら検討する。

この場合、作為的機能を有するⅡ形とⅣ形の対立となる。

- katura "to be many, much" の II 形を使った (27) の例では、それまでは「少ない (qalil)」人数であった「お前達 (マドヤン人)」を「神」がその意志的な直接的行為によって「多い (katir)」人数に変えたという状況であり、(28) の例ではそれまでも「大きい (katir)」ものであった「ノア」との「論争 (jidal)」を小さくすることをせずに「大きい (或は、大きくなる)」ままにしておいたという状況である。従って、両者の間に作爲的機能と認可的機能による中心的対立と、直接性と間接性による副次的対立が弁別される。

この場合、結果的使役機能を有するⅡ形とⅣ形の対立となる。

- 39 —

(30) 33-26 ?anzala alladīna zāharū-hum min ?ahl-i
 Perfective-IV-he-Ag-Sub relative support-them from people
 al-kitāb-i min ṣayāsī-him -gen
 the-book-gen from fortress-gen-their
 'He (God) caused the people of the Book who supported them
 from their fortress'

nazala "to go down" ¹²⁾ のⅡ形を使った (29) の例では「山なす雲 (jibāl)」には行為に対する支配能力はなく、「神」の御手によって直接的に「おりている」状態に置かれるという状況であり、(30) の例では、「神」からの使役的效果によって、「啓典の民達」が自らの意志で「おりる」という状況である。直接性と間接性の対立は顕著である。焦点の相違については、次のような同一箇所が対照的に使われている場合により明確になる。

(31) 5-112 hal yastaticu rabb-u-ka ?an yunazzila galay-nā
 able lord-Sub-your to Subjunctive-II on-us
 -he -Ag-Sub
 mā?idat-an min al-samā?-i
 table-Go-Ob-acc from the-heaven-gen

(32) 5-114 rabb-a-nā ?anzil galay-nā mā?idat-an min samā ?-i
 lord-acc-us Imperative-IV on-us table-Go-Ob-acc from
 the-heaven-gen

' And when the Apostles said, "Oh Jesus, son of Mary, is your Lord able to send down (II) on us a Table from the Heaven?" ... "We desire ... that we may know that you have spoken true to us, and that we may be among its witnesses ." Said Jesus, son of Mary, " Oh God, our Lord, send down (IV) on us a Table from the Heaven, that shall be for us a festival, the first and last of us ... "'

この場面での使徒達の関心事は、神が全能であるか否かの問題であり、その確認の

ためのイエスに対する問いかけである。従って、使徒達の焦点があてられているのは、「おろさせる」という神の使役行為とその行為の唯一の証しとなるべき彼らの面前でのテーブルの顕現つまり行為の結果的状态である¹³⁾。一方、神の全能を確信するイエスの焦点は、「おろさせる」という神の使役的行為のみにあてられている。

(3) D 型動詞

この場合、結果的機能を有するⅡ形と使役的或は認可的機能を有するⅣ形の対立となる。

- (33) 10-16 mā yakūnu l-ī ?an ?ubaddila-hu mintilqā?i nafs-ī
not -it-is for-me Subjunctive-Ⅱ-I -Ag-Sub-of -my-own-accord
-it-Go -Ob

'It is not for me (Muhammad) to change (make changed) it (the Quran) of my own accord'

- (34) 14-33 ?a lam tara ilā alladīna baddalū niḡmat-a allāh-i
not-saw to rel (pl) Perfective-Ⅱ-they-Ag-Sub grace-of -God
kufr-an -Go-Ob-acc
unbelief-Rec-acc

'Didn't you see those who had changed the grace of God to unbelief'

- (35) 66-5 ʿasā rabb-u-hu ?in ṭallaqa-kunna ?an
possibly lord-Ag-Cr-Sub -nom-his if divorced-you (pl.fem)
yubdila-hu ?azwāj-an xayr-an min-kunna
Subjunctive-Ⅳ-him-Go -Ce-Ob wife (pl)-Rec-acc better-acc
-than-you

'It is possible that, if he (Muhammad) divorces you (Muhammad's two wives, Ḥafṣa and ʿĀʾisa), his Lord will cause him to change (ø-Go-Ob=you) to wives better than you...'

badala "to change" のⅣ形の例、(35)では、ムハンマドとの約束を破ったことに改悛の情を示す彼の妻達への、再び彼に背かないようにするための警告の場面であるが、文脈からも使役的、間接的意味は明白である。一方、Ⅱ形の(33)では「(もっとよいものに)コーランを改訂せよ」との不義者達の言葉へのムハンマドの応答の箇所

であるが、「自主的に(min tilqā ?i nafsī)」の副詞句からもわかるように、Causee という中間要素の存在しない直接的行為を意味するのは明かである。(33)では結果的状态の含意は弁別し難いが、たとえ話で人々に反省を求める文脈での(34)では、「神の恩寵を捨て背信心を持って(亡びてしまつて)いる」状態に焦点があてられ、不信の終局が強調されている。

4.2.3. 再帰的IV形とII形(③④の場合)

IV形が、使役の意味を有せず、全体的に原形と類似する意味を有している場合がある。

- (36) 32-12 rabb-a-nā ?absarnā wa samiġnā
 lord-acc Perfective-IV-we-Ag-Cr-Sub and
 'Oh, our Lord, we saw and heard'

- (37) 28-10 baṣurat bi-hi ġan junub-in
 Perfective-I-she-∅-Sub to-him from side-gen
 'She saw him from afar'

(36)のようなIV形は、何らかのGo-Causee-Obが消去されたものとも考えられるが、普通のII形、IV形のGo-Obの消去の場合、文脈等から消去要素が回復可能であるのに対して、この場合は不可能である。

- (38) 9-78 ?axlafū allāh-a mā waġadū -hu
 Perfective-IV-they-Ag-Cr-Sub God-Go-Ce-Ob-acc what
 -they-promised-him-Go-Ob
 'They caused God to leave behind what they promised Him'

- (39) 14-26 ?axlaftu-kum (Go-Ob = ∅ = waġd-i)
 Perfective-IV-I-Ag-Cr-Sub-you(pl)-Go-Ce-Ob
 'I caused you to leave behind (my promise)'

- (40) 34-38 huwa yuxlifu-hu (Go-Ce-Ob = ∅ = kum)
 he-Ag-Cr-Sub Imperfective-IV-it-Go-Ob
 'He causes (you) to leave behind it'

- (41) 20-89 ?axlaftum (Go-Ce-Ob = ∅ = ?) mawġid-i
 Perfective-IV-you(pl)-Ag-Cr-Sub promise-Go-Ob-my
 'You left behind my promise'

このようなⅣ形の処遇について、次の例は示唆的である。

- 上例中の wajh + possessive pronoun 或は nafs + possessive pronoun の形式を一種の再帰代名詞とみなし、ʔaslama + wajh or nafs + possessive pronoun の構造を IV 形における Causer = Causee の再帰的表現形式の発芽とみなせるならば、(41)、(42) は Causee である再帰代名詞が消去されたものとして扱える。Go-Causee-Ob の消去によって、一項型原形に対応する二項型 IV 形は、再び一項型の再帰的 IV 形になり、二項型に対応する三項型 IV 形は、同様に再び二項型の再帰的 IV 形になる。つまり前者の IV 形は自動詞的になり、後者の IV 形は他動詞的になり、表面的に各々の原形と類似することになる。

まず、一項型再帰的IV形との例をあげる。

- 43-

- (46) 43-52 lā yakādu yubīnu
 not be-almost Imperfective-IV-he-Ag-Cr-Sub
 '... Am I better than this (Mose), who is contemptible, and
 hardly makes clear (expresses himself clearly)'

bāna "to be clear"のⅡ形における作為的機能は一目瞭然である。(46)は、ファラオがモーゼについて述べるくだりであるが、「自分自身を明白にする(しておく)」つまり「明白に話す」と考えられ、使役的読み(或は認可的読み)が可能である。

次に、二項型再帰的Ⅳ形との例をあげる。

- (47) 5-33 tawwaṣat la-hu nafs-u-hu
 Perfetive-II to (Ob-marker)-him-Go-Ob self-Ag-Sub-nom
 (dative) -his
 qatl-a ?axi-hi fa-qatala-hu
 killing-Go-Ob-acc brother-gen-his then-killed-him
 'His (Cain) self made him obedient to the killing of his
 brother (Abel), and then he killed him'
- (48) 43-54 fa-staxaffa qawm-a-hu fa-?atāGū-hu
 then-made-uneasy people-Ob-acc-his then-Perfctive-IV-they
 -Ag-Cr-Sub-him-Go -Ob
 'He (pharaoh) made his people uneasy, so they made themselves
 obey him (obeyed him)'

Cβ型のtāca"to obey"のⅡ形を使った(47)の例は、旧約聖書の有名なカインとアベルの物語の一節であるが、ここでカインはアベルの批判的言葉を聞いて思わずアベルを殺してしまったのである。従って、表現的には、自制不可能な彼の「感情(nafs)」が、それとは別のものと考えられる彼(或は彼の肉体)を、「殺すこと(qatl)」に「従っている」状態に置くということである¹⁴⁾。結果的状态の含意は、後続の文からも明白である。(48)では、ファラオのモーゼに対する批難的布告に応じて、人民が浮き足だち、自ら進んで翻り、ファラオに従ったという状況でる。「自らを従わせる」というⅣ形の間接性を示す表現によって、ここでは従う側の自発性が強調されることになり、直接性を示すⅡ形によって、従う側の非自発性が強調されている(47)の例と好対照をなす¹⁵⁾。

4. 3. 内的指示のⅡ形とⅣ形（⑤の場合）

Ⅱ形によって表出される全ての状態が、客観的事実として観察或は認知されうるとは限らない。

(a) ダーリンは、うそつきである。（状態）

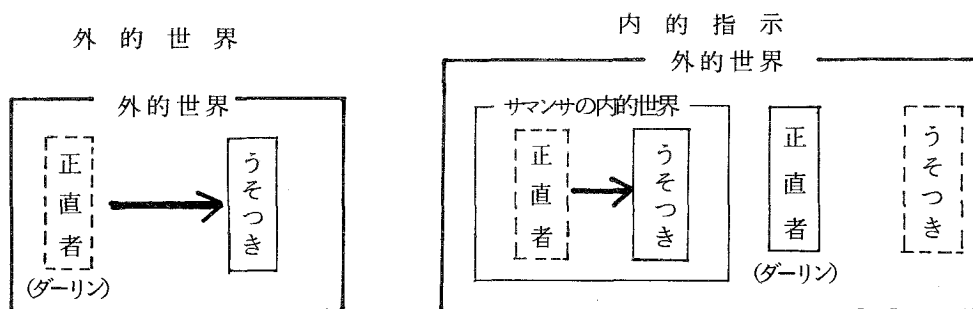
(b) サマンサは、ダーリンをうそつきにした。

(b)が真ならば、(a)は真であり、(b)は(a)を含意する。しかし、(a)に対応する現実の状態には二つの場合が想定できる。

(c) サマンサは、魔法でダーリンをうそつきにした。

(d) サマンサは、心の中でダーリンをうそつきとした。

(c)では、ダーリンの正直者からうそつきへの変化は、現実の外的世界での現象であるが、(d)では、その変化はサマンサの意識内つまり内的世界だけの現象であり、対応する外的世界での変化は起らない。(c)の含意する状態(a)が、彼女以外の第三者にとっても客観的に真と観察されうる状態であるのに対して、(d)では、彼女だけにとって真である主観的状态である。従って、所謂estimativeなⅡ形と普通のⅡ形の相違は、結果的状态が顕現する世界の相違に還元できる。以後、前者の機能を内的指示、後者の機能を外的指示と呼ぶ。



内的世界の対象の状態とは、対象に対する認識であり、単なる一過性の想像的状态ではないこと、状態の変化とは認識の変化に他ならないことにここで留意すべきである。理論的には全てのⅡ形が内的指示機能を持ちうるし、コーランの中でも両機能を持つⅡ形が散見される。事実、次の例のようにどちらの機能か判定し難い場合も多々ある¹⁶⁾。

(49) 34-19 qad šaddaqa Galay-him ?iblis-u zann-a-hu
 Perfective-11 on-them Ag-Sub-nom thought-Go-Ob-acc
 -his

- 'Iblis made his expectation true upon them (the sabaeans)' (外的指示)
- (50) 70-26 alladīna yuṣaddiqūna bi-yawm-i al-dīn-i
 relative (pl) Imperfective-II -they-Ag-Sub with-day-gen
 the-judgment-gen
- 'Those who count true (believe in) the Day of Judgment' (内的指示)
- (51) 37-105 qad ṣaddaḡta al-ruṣṣaya-a
 Perfective-II -you-Ag-Sub the-vision-Go-Ob-acc
- 'You (Mose) counted true or made true the vision'
- (外的指示 or 内的指示)

IV形の場合も、内的指示機能を持つことが可能である。この場合、内的世界のCauseeは行為に対して支配力を持ちえず、a型の原形に対応する認知的IV形のみとなる。状態つまり認識に変化はなく、語用論的には、現時点までの対象 (Causee) に対する認識の再確認となる。

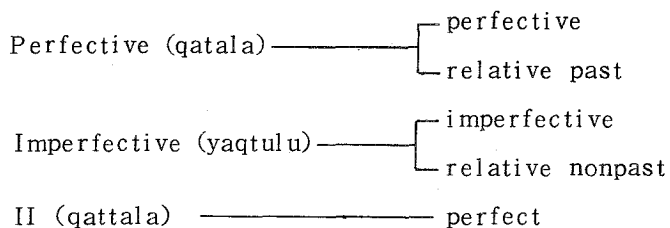
- (52) 2-181 li-tukabbirū allāh-a calā mā hadā-kum
 to-Subjunctive-II -you (pl) -Ag-Sub God-Go-Ob-acc on what
 guide-you
- 'God wishes to make it (fast) for you, and does not wish to make it difficult for you...in order for you to magnify (count magnificent) God for the guidance He gave you'
- (53) 12-31 lammā raṣayna-hu ṣakbarna-hu
 when see -they (fem) -Sub -him-Ob Perfective-IV -they-Ag
 -Cr-Sub -him-Go-Ce-Ob
- 'She said (to Joseph), "Come forth to them!" . So when they saw him, they so admired him that they cut their hands, and said, "Saving God's presence! this is not a man, nothing but a noble angel"

(52)の場合は、「神によって汝等は導かれた」のだから、「神」に対する「(あまり偉大でない)」とのこれまでの認識を「偉大である」との認識に改めなさいという状況であり、行為の対象は現実に存在する「神」ではなく、人間の意識 (内的世界) 内で思い

5. 結 語

以上のような古代アラビア語のⅡ形に関する考察の結論として次のことが言える。

古代アラビア語の動詞派生体系において、Ⅱ形は、原形から直接的に派生されるのではなく、状態形から派生され、その意味で原形から直接的に派生されるⅣ形とは相違する。また、その基本的機能は、行為とその行為完了後の結果的状态（つまり状態形が示す状態）の双方に焦点をあてる perfect のアスペクト機能である。従って、古代アラビア語（或は、Proto-Arabic）のテンス・アスペクト体系は次図のようになる¹⁸⁾。



しかしながら、コーランのアラビア語においては、語い化したⅡ形や使役的機能が強調されたⅡ形も在証される。このⅡ形の機能の変化は、qad や active participle による他の分析的アスペクト形式の発達と関連するのであるが、この段階のⅡ形の諸機能をⅣ形との対立関係の観点からまとめると次のようになる。

外 的 指 示			内 的 指 示 ¹⁹⁾	
	Ⅱ 形	Ⅳ 形	Ⅱ 形	Ⅳ 形
基 本 的	作為的 結果的使役 結 果 的	使 役 的 認 可 的	認 識 変 化	認 識 再 確 認
副 次 的	直 接 性 低い支配程度	間 接 性 高い支配程度		

補 注 : 本稿で用いる略号を記す。

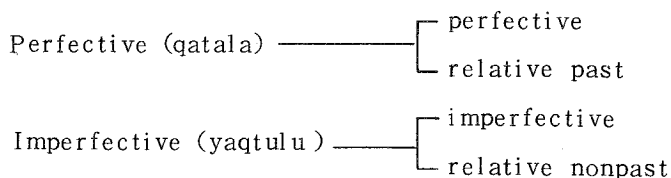
Ag (ent), Go (al), Po (sitioner), Pr (ocessed), Fo (rce), Rec (ipient),
Ben (efactive), Dir (ection), So (urce), Loc (ation), ∅ (=zero semantic
function), Instr (ument), Sub (ject), Ob (ject), C (ause)r, C (ause)e,
nom (inative marker), acc (usative marker), gen (itive marker), rel (ative
marker), s (in)g (ular), pl (ural)。

注)

1) 本稿で用いたコーランの底本は所謂 Flügel 版の Tehran での再版本であり、引用文の節番号も全て Flügel 版のものである。参考にした翻訳は、井筒 (1964²)、伴・池田 (1970)、Arberry (1953)、Bell (1937)、Blachère (1972)、Paret (1966) である。また、注釈書については、al-baydawī のものと al-tabarī のものを参考にした。

2) アラブ古典文法での分析の詳細は、修士論文の p.14 ~ 22 を参照。

3) ここでいうアスペクト機能とは、現象の時間の内的構成をいかに見るかという認知レベルの概念である。Comrie (1976) に従えば、現象の内的構造に目を向ける見方又は機能が, imperfective であり、現象全体を単一的に見る見方が perfective であり、以前の行為とその結果的状态に目を向ける見方が perfect である。従って、古典アラビア語の二つのアスペクト形式 Perfective と Imperfective の機能は次のように提示される。



(Comrie ibid. pp. 78-82.)

4) 例えば "John is kicking a ball (for an hour)" という文の場合、アスペクト形式・進行形の持つアスペクト機能・進行相と "kick" という動詞の持つ [+dyn, +con, +mom] のアスペクト特性の結合により <反復> のアスペクト的意味が顕現する。

5) 例えば、「おりる」という動詞の場合、「おりている」という非瞬時的行為の途中段階の「まだおりたっていない」の状態から、行為完了後の「おりたっている」の状態への変換現象を示す動詞であるから、当然、行為完了後には言わば－から＋への結果的状态が顕現するわけである。「非瞬時的(〔-mo m〕)」が、完了前の行為の特性を示すものであり、それ自体には当然時間的長さのない－から＋への変換の特性を示すものではないことに注意を要する。

6) 例えば、「殺す」という動詞の場合、「何もしていない」の状態から「殺す」の行為へ、さらに再び「何もしていない」の状態への瞬時的変化を示す動詞であるから、言わば－から＋へ、そして再度－への変換の経験者としての行為者側には当然変化は顕現しない。

7) non-verbal とは, infinitive, active participle, passive participle, 再帰形の V 形でのみ在証される場合である。また, A 型動詞の多くは C 型動詞にも分類されるが(例, *hasuna* "to be or become good") そのような動詞は全て A 型動詞とみなした。

8) これらの B 型動詞は V 形でのみ在証される。

tatawwafa (V) : 'to go round about'
(2-153, 22-30)

cf. *tāfa* (I) : 'to go round about'

tawf (noun) : 'round, circuit'

taqawwala (V) : 'to fabricate lies'
(52-33, 69-44)

cf. *qāla* (I) : 'to say, speak'

qawl (noun) : 'speech, word, report'

tāfa の場合は、原形、V 形(Ⅱ形もコーラン以外では在証される)も名詞 *tawf* からの denominative とみなすべきであろう。*qāla* の場合は、V 形(Ⅱ形はコーラン以外でも在証されない)は、名詞 *qawl* からの denominative と意味的にもみなせう。従って、これらがここでの仮説の必要十分な反例であるとは言いがたい。

9) 例えば, *ḡadda* "to count" (DⅡ) のⅣ形 ("to prepare < to cause to count?")

は常にGo-Causee のない意味的に語彙化された動詞として使われるが (cf, II 形 “to count”), この場合はGoにSub 付加された受身文がみられる (3-127の生起例を参照)。

- 10) 支配能力の有無はGoの“animacy”に関係するが、現象レベルでGoが持つ“animacy”が、認知或は表現レベルでGoが持つ“animacy”と必ずしも一対一の対応をしないことに注意を要する。

7-52 allāh-u... yuḡṣī al-layl-a al-nahār-a
 God -Ag -Cr-Sub-nom Imperfective-IV the-Go-Ce-Ob-acc
 the-Go-Ob-acc
 ‘God (was) causing the night to cover the day, and so it (the night)
 (was) seeking it (the day) urgently ...!’

「夜 (al-layla)」は、現象レベルでは〔-animate〕であり、直線的表現 (non-metaphorical) でも「おおう (ḡaṣiya)」に対して〔-animate〕つまり支配能力のないGoとして認知されるが、上例のmetaphorical な表現では〔+animate〕つまり支配能力のあるGoとして認知される。

- 11) najā は頻度の高い動詞の一つであり、その“animacy”“複数性”に関する分布は次表ようになる。

	Ag 要素			Go 要素					Ag, Go 両方とも sg	Ag, Go どちらかがpl
	sg	pl	mass	sg	pl	mass	+ani	-ani		
II 形 (計 37 例)	13	22	1 (∅=1)	7	29	1	37	0	4	32 (∅=1)
IV 形 (計 23 例)	7	16	0	2	20	1	23	0	2	21

(±ani = ±animate)

- 12) この最も頻出する動詞の分布は次表ようになる。

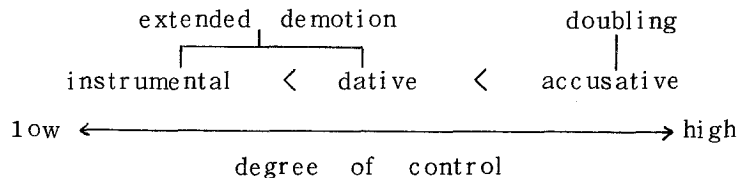
	Ag 要素			Go 要素					Ag, Go 両方とも sg	Ag, Go どちらかが pl
	sg	pl	mass	sg	pl	mass	+ani	-ani		
Ⅱ 形 (計63例)	35	14	1 ($\emptyset=13$)	34	7	20 ($\emptyset=2$)	5	56	31	17 ($\emptyset=15$)
Ⅳ 形 (計183例)	72	55	1 ($\emptyset=55$)	71	22	90	13	170	65	63 ($\emptyset=55$)

13) 現象レベルでは「テーブル」は当然〔-animate〕であるが, 〔+animate〕の存在として認知・表現されていることに注意。つまり, 「テーブル」は「おちる」のではなく「おりる」のである。森羅万象が神の意志の反映であり, その意志が内在化されているというキリスト教的或はイスラム教的な神概念からみれば, 神の使役行為の場合, Causee の自由意志もまたCauser である神の意志となり, 厳密な意味での使役行為とは異なってくる。

14) Comrie (1975, 1976, 1981) によれば, 使役化による文法関係の変化には次のような階層構造があり, 各々の項要素はそれに沿って次のものへ降下 (demote) する。さらに, 二項動詞の場合は, Go-Causee-Ob と Go-Ob が同一の表現形式をもつようになる場合 (doubling) と, 一つ越えて降下し Go-Ob と異なる表現形式をもつようになる場合 (extended demotion) の二つに類別される。

subject > direct object > indirect object > oblique object

一般的にinstrumental, dative, accusativeの表現形式を考えた場合, 行為に対するCausee の支配の程度 (degree of control) との関係は次のように示される。従って, "la-hu (dative)"についてもextended demotion の場合とみなすならば,



Ex. Taroo ga Ziroom o ik-ase-ta (Japanese)

'Taroo made Ziroom go'

Taroo ga Ziroom ni ik-ase-ta

'Taroo got ziroom go'

Comrie (1981) p.
175 より引用

Ⅱ形のCausee は支配の程度が低いとする本稿での仮説と合致する。

- 15) 同様の対立は、特に α 型の原形とその再帰的Ⅳ形の間で顕著になる。例文の(36), (37)の場合, $A\alpha$ 型の原形の“見る”とその再帰的Ⅳ形が全体的にもつ $A\beta$ 型の“見る”との対立が弁別される。
- 16) (51)は、旧約聖書の有名なアブラハムとイサクの物語であるが、息子のイサクを燔祭の犠牲にせよとの神からのお告げの夢を、アブラハムが実際に殺す寸前にまでいったことで外的世界での真実としたとも解釈できるし (cf Arberry “confirmed the vision” p. 460, 井筒「かの夢に対する汝の誠実は既に見えた」下p. 41), アブラハムが神のお告げとしての夢を信じた (真実であるとみなした) とも解釈できる (Bell “counted the vision true” vol. 2. p 446, 伴・池田「夢に忠実であった」p. 105)。この動詞の他の生起例については、39-34, 70-26, 75-31, 92-6, 56-57, 66-12 の6例が内的指示で、28-34, 37-36 の2例はあいまいである。
- 17) コーラン以後の古典アラビア語で使われる kabbara (Ⅱ)には, “to say’ God is the greatest (allah ?akbar)” という delocutive な用法もみられるが、ここでは単純に “to regard as great” の意味で使われている。
- 18) 未解決の問題として、状態形 (東セム語にのみ在証される) と Perfective の通時的関係の問題、反復的機能 (iterative) の問題等があるが今後の考察の課題としたい。
- 19) 内的指示の場合も基本的或は副次的諸機能は弁別されるが、図においては省略した。

参考文献

Text of the Quran;

Flügel, G. 1883 *Corani textus arabicus*, Leipzig (rpt. Tehran, A.H.1351).

————— 1898 *Concordantiae Corani Arabicae*, Leipzig.

Translations of the Quran;

Arberry, A.J. 1955 *The Koran Interpreted*, Oxford.

Bell, R. 1937 *The Qur’ān*, Edinburgh.

Blachère, R. 1972 *Le Coran*, Paris.

Paret, R. 1966 *Der Koran*, Stuttgart.

伴 康哉 ・ 池田 修訳『コーラン』中央公論社

「世界の名著」17, 1970.

井筒俊彦訳『コーラン』3巻, 岩波書店, 1964².

Commentaries of the Quran;

al-baydawī *anwāru al-tanzīli wa asrāru al-taʾwīli*, 2 vols, ed. H.O.

Fleischer, Lipsiae, 1846-48 (rpt. Leiden, 1968).

al-tabarī *jāmiʿu al-bayāni fī tafsīri al-qurʾāni*, 30 vols., Būlāq,

A.H. 1323

Other references;

Aissen, J. 1979 *The syntax of causative constructions*, New York.

Bolozky, S., & G. N. Saad 1983 "On active versus non-active causativizable verbs in Arabic and Hebrew", *Zeitschrift für arabische Linguistik*, 10, 71-79.

Brockelmann, C. 1908 *Grundriss der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen*, 2 vols., Berlin.

Buccellati, G. 1968 "An interpretation of the Akkadian stative as a nominal sentence", *Journal of Near Eastern Studies*, 27, 1-12.

Comrie, B. 1975 "Causatives and universal grammar", *Transactions of the philological Society*, 1974, 1-32.

————— 1976 "The syntax of causative constructions: cross-language similarities and divergences", in M. Shibatani ed. 1978, 261-312.

————— 1976 *Aspect*, Cambridge.

————— 1981 *Language Universals and Linguistic Typology*, Oxford.

Dik, S. C. 1978 *Functional Grammar*, Dordrecht.

————— 1980 *Studies in Functional Grammar*, London.

Fleisch, H. 1968² *L'Arabe classique: Esquisse d'une structure linguistique*, Beyrouth.

Foley, W. A. & R. D. Van Valin, Jr. 1984 *Functional syntax and universal grammar*, Cambridge.

- Kurylowicz, J. 1973 "Verbal aspect in Semitic", *Orientalia*, 42, 114-20.
- Lyons, J. 1977 *Semantics*, 2 vols., Cambridge.
- Macdonald, J. 1963 "The Arabic derived theme : A study in form and meaning", *The Islamic Quarterly*, 7, 96-116. (reproduced in Al - Ani ed. *Readings in Arabic Linguistics*, I.U.L.C. 1978, Bloomington)
- Nöldeke, Th. & F. Schwally 1909-29² *Geschichte des Qorans*, 3 vols., Leipzig (rpt. 3 parts in 1 vol. 1961).
- Reckendorf, H. 1921 *Arabische Syntax*, Heidelberg.
- Rowton, M.B. 1962 "The use of the permansive in Classic Babylonian", *Journal of Near Eastern Studies*, 21, 233-303.
- Saad, G.N. 1982 *Transitivity, causation and passivization: A semantic-syntactic study of the verb in classical Arabic*, London.
- Shibatani, M. 1976 "The grammar of causative constructions : a conspectus", in M. Shibatani ed. 1976, 1-40.
- ed. 1976 *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*, New York.
- Soden, W. von 1969² *Grundriss der akkadischen Grammatik*, Roma.
- Tedeschi, P. & A. Zaenen eds. 1981 *Syntax and Semantics 14: Tense and Aspect*, New York.
- Wright, W. 1896-98³ *A grammar of the Arabic language*, Cambridge.

- 池田 修 1976 『アラビア語入門』 岩波書店
- 井筒俊彦 1983 『コーランを読む』 岩波書店
- 山田小枝 1984 『アスペクト論』 三修社